

鬼談

鬼神 鬼気 鬼棲 鬼景 鬼慕 鬼情 鬼縁 鬼想 鬼交

八百人の子供の首を斬り落とさなければならぬ程。

247 209 173 137 107 073 031 027 005

●目次

鬼交



装帧
坂野公一 (welle design)

ポダン説に鬼交は人交と異なること無し、唯だ鬼の精冷たきを異すと――。

南方熊楠「鶏に関する伝説と民俗」

花瓶の表面が艶めかしい。
 触れてもいないのに陶器のつるりとした冷やややかな触感が蘇る。
 記憶の中の感覚は必ずしも触れた時そのままの部位に喚起される訳ではない。花瓶に触れるのは概ね、掌なのだろうが、花瓶の表面の艶やかな触り具合は、何故か全身の皮膚に、それも首から胸――乳房のうへの辺りに、ひと際集中的に蘇った。
 漫ろな気分になる。

花瓶には、笹百合が一輪だけ挿してある。

花瓶の、その質感とは裏腹に柔らかな曲線を描いて窄まった口から、真っ直ぐに茎が伸びている。その茎は線形の葉を互生させ、やがて少し不恰好に湾曲して、固く尖った花を突き出している。花はまだ完全には開き切っていない。でも百合はいつもあつという間に開くから、その太い茎から花瓶の中の水をどくどくと吸い上げて朝には開いているのかもしれない。

どくどくと。水を。

花瓶の、その内側を想像する。内側はぬらぬらと濡れそぼっているに違いない。花に遮られ光も届くまい。玄く、そして滑らかな水面に、茎は屹立しているのだろう。そして水を吸い上げているのだ。そして——余所見をしている間に、きつと花卉は開くのだろう。

開いたらすぐにおしべの葯を摘んでしまわなくてはいけない。

花粉が落ちるから。

花粉が床に落ちてしまったら——絨緞が鄙俗しい花粉色に染まってしまいうから。

でも、開きかけの蕾は未だ固そうだった。

このままずっと見続けていたなら、花卉が開いていく過程を見ることが出来るかもしれない。何だか頭の芯が朦朧としているから、いつまでも見えていられそうな気もする。ただその、まだ百合の芳香を発散する前の青臭い花は、瞭然とは見えていなかったのだが。

花は視界の少し外にある。視界に入っているのは——花瓶だけである。

小振りの花瓶は、微妙な色合いをしている。直接に触れば冷たいことは確実なのに、その乳白色から萌葱色に緩やかに移ろう微妙な色合いは、見ている分には温もりまでも喚起させる。

——見ている。

そう。私は花瓶を凝視している。

視野が異常に狭い。花瓶以外は殆ど何も見えていない。おまけに瞳を動かすことができない。私は眠っているのか。寝台に横たわっているうちに微睡んでしまったのかもしれない。でも。

眼球の表面の粘膜が乾いていくのが判る。眼は明いているのだ。

瞼を閉じようとするのだが、どうもままならない。自由が利かない。

下瞼に力を入れると、目頭が僅かに痙攣して——。

やがて、ぴくりと涙腺から液体が分泌された。

眼球の膜面が潤う。睫が濡れる。途端に視界が瑞々しくなって、硬質なはずの花瓶がぬるりと滲んで見えた。

——ああ、軟らかい。

何て軟らかいんだろう。涙越しの世界はどれもこれも、瑞々しくてやわらかいんだ。

花瓶の背後ろ。

カーテンの襞が揺れる。ゆらりと揺れる。ひらりと捲れる。捲れあがった襞が、百合の花に僅か、ほんの僅か、触れる。触れたように見える。動きが酷く緩慢りとしている。襞はやがて花瓶の表面を微かに、微かに撫でる。

びくりとする。

その刹那カーテンは花瓶を温かく感じたか。軟らかく思ったかと、そんな妄想が瞬間的に脳裏を占領して消える。

カーテンの襞はぬるりと花瓶をなぞって、緩々と元の場所に戻った。とても鈍い。空間が粘ついてでもいるかのようだ。柔らかな布の襞というものは、こんなにもゆっくりと動くものだろうか。時間感覚が麻痺しているのだろうか。

時間の流れがどろどろと滞っているから、空間も密度が濃くなっているのだろうか。ぬらりとしたサテンの襞は、粘性を帯びた濃密な空気 of 振動に合わせて、まだひくひくと揺れ動いて見える。

決して涙で滲んでいる所為ではない。

——ああ。

窓が開いているんだ。

きつとそうに違いはない。

換気のために開けて、閉め忘れたのだろう。

換気のため——という、味気ない日常語がとても懐かしく響く。換気という、含蓄のない乾燥した事務的な漢字の連なりが想起され、それで少しだけ自分を取戻す。

——ああ、いけない。

不用心だ。閉めなくては、戸締まりをしなくてはと思う。

こんな時間に窓なんか開けていたら何が侵入って来るかわからない。

何か厭なものが侵入って来たら。

さあ、閉めなくては。

さあ。

起き上がれない。躰が動かない。

後頭部に濡れた綿が詰まっているかのような、湿った、厭な感覚。頭の芯がずくずくとするだけで、躰はまるで反応しない。動かそう動かそうという意志が、神経の束の途中で凝って、渦巻いている。意志は末端までは到達しない。

私は小指一本痙攣させることができない。

躰が睡っている。

覚醒しているのは私の一部分に過ぎないのだ。だからこんなに視野が狭いんだ。

だからこんなにもどかしいんだ。胸の奥がじりじりと焦げる。苛つく。

念じても動かない。

念の力でものを動かせるなんて嘘だ。

人間は自分の躰ひとつ満足に動かせない時があるんだ。
やがて集中力も途切れる。すうと意識が遠退く。

このまま眠ってしまえばどんなに楽だろう。窓なんか開いていたっていいや。このまま、ぐずぐずと睡眠の泥沼に沈んで行ければ、それはどんなに幸せだろう。そう思うと、どくどくと躰を流れる血流がその勢いを弱め、代わりにどろりと重たい粘性の液体が隈なく全身に行き渡る。

怠い。

倦さが心地良い。

やがてじゅう、と脳に液体が染みる。

刹那意識が途切れ、また接続する。意識が明滅する。

8ミリフィルムで上映されているみたいなのに、世界が点いたり消えたりする。画質も悪い。磨りガラス越しに眺めているように霞んでいる。瞼を閉じぬまま眠ってしまった場合、この景色は突如途切れるのだろうか。それとも徐々にフェードアウトして行くのだろうか。とても気になる。

——ああ、眠ってしまいたい。もうどうでもいいや。

既に動こうとする努力も気力もない。痺れるような陶醉感を伴って、意識が白濁していく。

——いや。

駄目だ。

駄目だ寝ちゃ駄目だ。何としても眠ってはいけない。

微かな警告。幽かな不安。私の、ずつと奥の方で、睡眠を妨げる思いが芽生える。

恐怖——そう、それは恐怖心だ。でも安堵感に包まれた恐怖心など、とても鈍いものである。

すう、と遠退く。

ああ、いい気持ちだ。

——駄目。

駄目だ。このまま眠ってしまったては絶対にいけない。私は——無理矢理に拡散した意識を集中する。役立たずの四肢を無理矢理に奮い立たせるべく、隅々まで意識を配信する。それでも躰は脱力していてぴくりとも動かない。腕も脚も、まるで夜具に吸いついてしまったかのように動きはしない。大腿部の内側と脚のつけ根がやや硬直する。

腰がやや浮いたような気がした。

腰椎から脊椎づたいに、送った力が逆流して来る。背筋の下の方から上の方に向かって徐々に緊張と弛緩が繰り返され、やがてその波は頸椎に至って、脳幹へと収斂した。

ずきずきと頭の芯が痛んだ。
途端に。

私の躰は更に脱力した。睡魔は一層に増した。
力を抜いたところで体勢は何も変わりはない。

僅かに浮いたように思えていた腰も、つまりは何も動いていなかったということだろう。
そんな気がしたただけだ。

麻痺しているのだ。

どうしようもない投げ遣りな気持ちになる。余計に朦朧として来る。

その時――。

ちくり。

針で突くような覚醒。

部分的に感覚が蘇った。皮膚の表面である。

露出している部分だ。わたしは殆ど何も身につけていないのだ。

下着に羅の夜着。薄掛け一枚。

薄掛けは腰のくびれの辺りまで捲れ上がっている。私の下半身は無防備に夜気に晒されているのである。

足の裏。足の甲。足首。ふくらはぎ。脛。膝。腿。太腿――ひりひりとした緊張が剥き出しになった肌の表面を駆け上がって来る。

厭だ厭だ厭だ。

隠したい覆いたい。

私は私と私以外の境界面だけで覚醒している。

こんな漫ろな思いをするくらいならいっそ早く意識を失ってしまった方がいい。もう、いい。窓が開いていたって構うものか。眠ろう睡ってしまおう。厭だ厭だ。眠りたい睡りたくない。ああ混濁する。足が――脚の形をした虚ろな皮膚が。ひりひりと――毛穴が開く。

産毛がそそけ立つ。

これは――。

これは、視線だ。

あそこ、誰かいる。

窓枠のところだ。

誰かが――。

誰かがあそこから中を覗いている。

私を私の躰を私の脚を脚のつけ根を凝眸しているんだ。

初出一覧

- 鬼交 『エロティシズム12幻想』(二〇〇〇年二月/エニックス)
- 鬼想 八百人の子供の首を斬り落とさなければならぬ程。
- 『小説新潮』第六五卷第一号(二〇一〇年二月/新潮社)
- 鬼縁 『幽』一八号(二〇一二年二月/メディアファクトリー)
- 鬼情 『幽』一九号(二〇一三年七月/メディアファクトリー)
- 鬼慕 『幽』二〇号(二〇一三年二月/メディアファクトリー)
- 鬼景 『幽』二一号(二〇一四年七月/メディアファクトリー)
- 鬼棲 『幽』二二号(二〇一五年一月/角川書店)
- 鬼気 書き下ろし
- 鬼神 書き下ろし



鬼談

2015年4月5日 初版発行

著者 きょくごく なつひこ
京極夏彦

発行者 堀内大示

発行所 株式会社 KADOKAWA
東京都千代田区富士見 2-13-3 〒102-8177
電話 03-3238-8521 (営業)
<http://www.kadokawa.co.jp/>

編集 角川書店
東京都千代田区富士見 1-8-19 〒102-8078
電話 03-3238-8555 (編集部)

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 図書印刷株式会社

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。落丁・乱丁本は、送料小社負担にて、お取り替えいたします。KADOKAWA 読者係までご連絡ください。（古書店で購入したのものについては、お取り替えできません）

電話 049-259-1100 (9:00 ~ 17:00 / 土日、祝日、年末年始を除く)
〒354-0041 埼玉県入間郡三芳町藤久保 550-1
©Natsuhiko Kyogoku 2015 Printed in Japan
ISBN 978-4-04-102474-4 C0093

京極夏彦 (きょくごく なつひこ)

一九六三年、北海道生まれ。小説家、意匠家、全日本妖怪推進委員会肝煎。九四年、『姑獲鳥の夏』でデビューする。九六年『魍魎の匣』で日本推理作家協会賞、九七年『喰う伊右衛門』で泉鏡花文学賞、二〇〇三年『覗き小平次』で山本周五郎賞、〇四年『後巷説百物語』で直木賞、一一年『西巷説百物語』で柴田錬三郎賞を受賞。著書に『旧怪談』『幽談』『冥談』『眩談』『ルールガルー』『南極(人)』『厭な小説』『死ねばいいのに』『数えずの井戸』『オジのサン』『書楼弔堂 破曉』『遠野物語 remix』『遠野物語拾遺 reold』ほか。小説以外では『怪談の学校』『妖怪の理 妖怪の檻』などがある。

公式ホームページ「大極宮」<http://www.osawa-office.co.jp/>

角川文庫

『幽談』

京極夏彦

顔を半分隠せば、それは幽霊の顔
美しさと不気味さが入り交じる幽かな短篇集

ISBN 978-4-04-101153-9



角川文庫

『冥談』

京極夏彦

そこは、死者の声が聞こえる魔所だった
生と死のあわいをゆくほの暁い旅路

ISBN 978-4-04-101152-2





メディアアファクトリー

『眩談』

京極夏彦

虚実は絢い交ぜになって——物語になる

視界が歪み、記憶が混濁し、暗闇が匂いたつ

ISBN 978-4-8401-4891-7